

戦後史 探検 4 昭和二十年代を歩く

「暴力の街」と呼ばれて 上

ノンフィクション作家 三山 喬

三十年以上前の遠い過去に、当たり障りのない会話をしただけの年長者。ほとんど無に帰した記憶の奥底から何らかの欠片を掘り起こせはしまいかと、昔書いた記事を貼り付けた切り抜き帳を眺めるうち、一九八六年の綴りに一カ所だけその人の痕跡が見つかった。

朝日新聞の埼玉版で当時続いていた飲食店の紹介欄。

その回は本庄市の老舗うなぎ店を取り上げていて、冒頭にある顧客の推薦コメントが、まさにその人物・関根秀一の言葉だったのだ。本庄市の助役で年齢はこのとき六十一。私は大学を出てまだ一年弱、朝日の北埼玉支局（熊谷市）に所属する駆け出し記者だった。

このグルメ記事は助役から情報を得てひとりで取材したものなのか、それとも私たちは連れ立ってうなぎ

を食べに行ったのか。残念だが、当時の情景はもうまったく浮かばない。

「暴力の街」と「暴力を追放した街」

群馬との県境・利根川の南側にある六市三郡を二年間、支局長を含め三記者でカバーした。一年目は事件事故といわゆる街ダネ（街のイベントなど）を担当した。東西約五十キロに及ぶ管内をポンコツの中古車で走り回っては、各地の警察署や市町村役場に顔を出す日々だった。在任中、本庄市にこれといったニュースはなく、市役所で知り合った関根助役との関係も、おそらくグルメ情報を聞く程度であっさりしたものだった。

そんな希薄な縁しかない人物の存在が、令和の時代に入っても頭の片隅にあったのは、支局の先輩に当時聞かされた「あの助役は若いころ『本庄事件』にかかわったひとりだよ」という言葉を覚えていたためだ。この市がまだ「本庄町」だった一九四八年（昭和二十三年）夏、一万人以上の町民が決起してやくざと癒着した町政の刷新を果たした出来事だ。本シリーズで「昭和二十年代」と向き合うことになり、ふとそんな遠い記憶が蘇ったのだ。

江戸時代、中山道最大の宿場町として栄え、明治の鉄道（高崎線）開通後は生糸や織物の集散地として賑わった本庄市。私が通っていた昭和の終盤には、すでに周辺自治体と似たような東京のベッドタウンになっていた。

それからさらに三十余年。JR本庄駅の北、旧中山道沿いの町並みを久しぶりに訪ねると、そこには想像したシャッター街の光景さえ見当たらず、そこかしこに駐車場の「余白」がある低層の住宅街が広がるだけだった。「市の中心的商業地」のポジションは、国道十七号沿いにある郊外型店舗のエリアにすっかり移っていた。宿場町・本庄の名残は、何か所かにまだ見られる崩れそうな旧家の土蔵に感じられる程度だった。

結局のところ、私は本庄事件の内容を具体的に知ることなく埼玉から離任した。やくざとつながった「ボス政治」の排除を訴えた若者たち。その動きのきつかけは、町の腐敗を告発する朝日新聞のキャンペーンだった。ほどなく運動は町ぐるみの規模に広がって、町政の刷新は成功した。その経緯は『暴力の街』（山本薩夫監督、独立プロ作品、一九五〇年）という映画になり、全国に知られた……。そんな概要を知るに留まった。

